

* 20cm 彗星搜索鏡は彗星を発見していた

アーカイブ室新聞 129号に、昭和26年に東京天文台職員組合が発行した「見学の栞」の中に彗星搜索鏡の図を見つけ、1928年1月号の天文月報で写真を見つけたという記事を書いた。天文月報 1927年12月号の雑報欄に東京天文台に新しく8吋望遠鏡が2台購入されたという記事があり、1928年1月号に彗星搜索鏡の写真が載っており、東北大学図書館のリポジトリ (<http://hdl.handle.net/123456789/28042>) の中に東京天文台絵葉書第4集の中の写真としてこの彗星搜索鏡の写真があった(写真1)。

見覚えのある出入り口

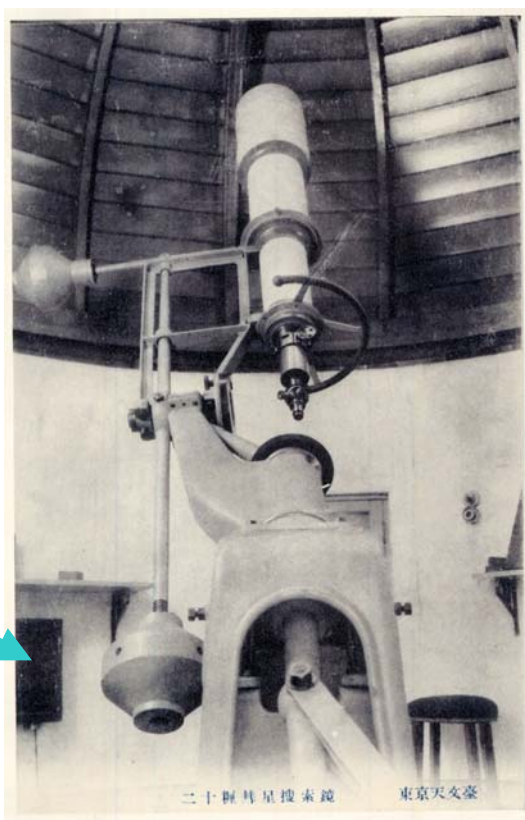
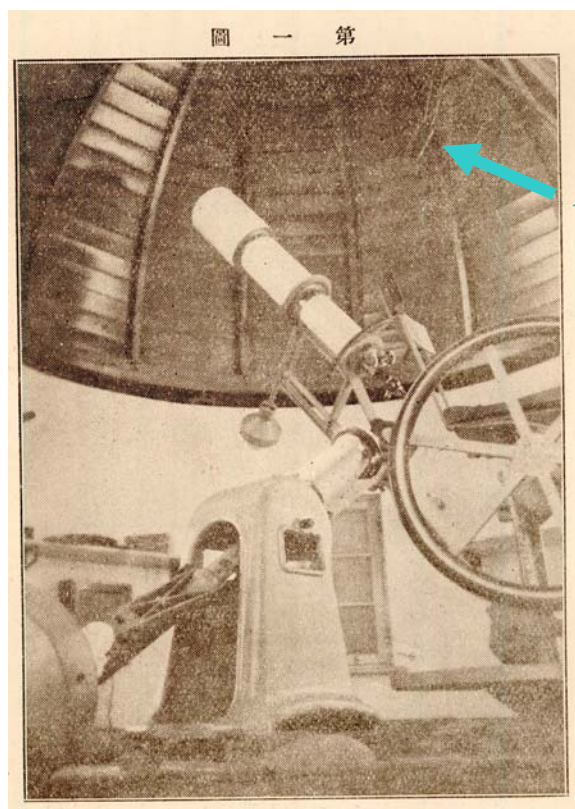


写真1 20cm 彗星搜索鏡

この望遠鏡の写真が見つかる前に、元東京天文台天体掃索部の香西さんにこの彗星搜索鏡の写真をお持ちでないかと尋ねていたら、写真は天体掃索部の頃は持っていたが、現在は持っていない、東京天文台職員組合の「見学の栞」は自分が手がけたものだという返事をいただいた。その返事のなかに、この彗星搜索鏡を使って下保さんが彗星を発見していると知らせてくれた。その彗星は1936年7月17.49日に光度5~6等旧で発見された「下保・Kozik・Lis 彗星」、旧仮符号で1936b、使用望遠鏡は20cmR27Xとある。

そして、この望遠鏡は、その後本来の彗星搜索には殆ど用いられず、東大の学部、研究

所の建物の基準面積が厳しく規制された際、建物は取り壊され、この望遠鏡のレンズは富田弘一郎氏が取り外し、月レーザーグループがレーザー送信用に転用したと言うのである。レンズの行方は月レーザーグループに尋ねてみよというので、そのグループにいた佐藤英男氏に写真1と天文月報に掲載されたこの彗星搜索鏡の写真2とを持って話しに行ったところ、彼は写真1のドームは自分が使っていたドーム、現在は東大天文学教育研究センターの敷地にある30cm望遠鏡のドームのようだという。筆者は写真2に写っているドームスリット開閉用取っ手から卯酉儀ドームのようだと思っている。佐藤氏の使っていたドームのスリットはロープで車輪を回し、駆動軸がユニバーサルジョイントで開閉していたという。またまた疑問が出てきた。次から次となぞが出てくる。アーカイブの仕事はおもしろい。これらについてご存じないかのご存命の先輩方に手紙を書いた。返事が待ち遠しい。



スリット開閉用取っ手

写真2 天文月報 1928年1月号の写真